

補 足

本誌前號に「南方諸地域に於ける脚鬚目概説」と題する拙稿を掲げたが、書き出しを次のやうにすべく原稿を用意したのにうつかりして此の部分の掲出を忘れてしまつたので妙な次第であるが此處に掲げる。

南方諸地域に於ける脚鬚目概説

高 島 春 雄 Haruo Takashima

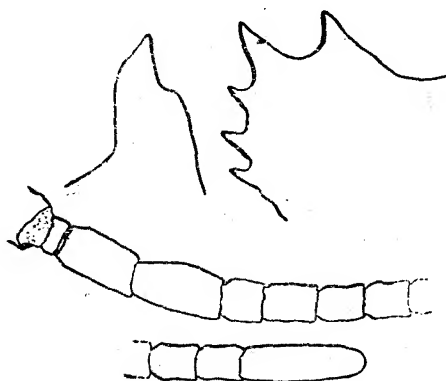
東京文理科大學動物學教室

内 容

I	脚 鬚 目 鳥 瞰……………	32
II	南方諸地域に見る代表的の種類……………	39
III	臺灣紅頭嶼産全蜘蛛目及脚鬚目……………	48
III	脚 鬚 目 の 分 布……………	49

本稿は同じ著者の「南方諸地域に於ける蜘蛛概説」と姉妹篇を成すもので去る昭和19年1月脱稿した。爾來今日まで上梓の機を得られなかつたが其の間に戦火は本稿の最後の章V参考文献を亡失せしめた。脚鬚目は節足動物門蛛形綱中にクモ・メクラグモ・サソリ等と對等の位置を占める1目であるが本稿は今後曾ての“南方 園”を支配し或は其處に動物學的踏査を行ふ人々にとり多少お役に立つかと思ふ。先づ脚鬚目の標徴、分類體系を記し属までの検索表を掲げて同好諸氏の便に供し、次に南方諸地域に見る代表的の種類を挙げたが日本産、中國産のものには稍々詳しく觸れた。臺灣の紅頭嶼は動物地理學上特異の地位を占めるが鹿野博士の採集品に基き同島産サソリ、サソリモドキに關し略報した。本稿を成すまでに多くの同學の方々の御援助を蒙つて居る。顧みて深き感謝を捧げたいと思ふ。特に此の類にも多くの關心を持ち研究された故廣島文理科大學教授佐藤井岐雄博士の不幸な御最期を懷ひ御冥福を祈ること切なるものがある。

それから動物學雜誌第56卷第9・10號（昭和20年10月）に私は「ブーゲンビ
ル島産脚類目」（東亞産全蝎類脚類の調査（其の十二）」といふのを掲げた。
中に入れるカット2箇所を用意したのであるが、其の後同誌ではカットを全然掲出
しない方針になつたので割愛した。其の内一つは本誌中に使用したから（第107
頁第6圖）第2圖のみを此處に掲げる。



パプアモンナシサソ
リモドキ♀上右は右
觸鬚轉節の縁棘を示
す。上左は右觸鬚頸
葉の前上部の突出。
下面觀。下は左第1
歩脚の鞭狀跗節の下
面觀。各圖何れも毛
を略す。×25〔原圖〕

§ 海南島産全蝎類追記 第三

辻忠二郎氏の御厚意により1944年4月15日華南海南島産サソリ標本1瓶を拜
借調査する機會を持つた。それは氏の身寄りの御方が同島で採集したものであ
るといふ。ホルマリン漬になつてゐて種類は何れも ヒノモトサソリであり測
定其の他は次表の如くである（單位耗）。

	性	體長	背甲長	背甲幅	前腹長	後腹長	觸鬚長	櫛狀器齒數
1	♀	42.5	5	5.5	14	23.5	18	右19左19
2	♀	41	5	6	12	24	17.5	19 20
3	♀	34	4	5	11	19	14	19 19

同年9月4日土居寛暢氏の御好意で同島産サソリ3頭を入手した。其等はやはり
ヒノモトサソリで1♂ 2♀♀と考へられる。櫛狀器齒數は♂右20枚左19枚、♀右

20枚左20枚、右20枚左21枚であつた。

§「八重山産全蝎目及脚類目」追記 第二

昭和18年12月3日鹿野忠雄博士の御厚意により氏が琉球、臺灣等で採集した標品3瓶を受領することが出来た。内容は臺灣本島産サソリモドキ(成體♂♀各1頭、ラベルには27X.1925とある)、琉球石垣島産サソリモドキ及びマダラサソリ、比律賓ミンダナオ島産カニムシモドキ等である。石垣島のサソリモドキは老熟した立派な♀で體長40.5耗(以下單位耗)、尾狀附屬物は約15、第1步脚跗節に於ける黒染と缺刻は左右共第8及び第9節にはつきり現れてゐる。

マダラサソリは1♂2♀♀で其の内1♂は完全な標品である。櫛狀器齒數は左右共17枚。1頭は破損し亡失した體部も多いがである。齒數は右20枚左19枚で之は寧ろ珍しい方である。残りの1頭も傷んでゐるが♀で齒數は左右共18枚。予がマダラサソリに就き齒數を算へたのは20例位に過ぎぬが其の限りでは齒數による性差は無いと考へられる。

前 號 正 誤			
頁	行	誤	正
10	- 4	「アトビサリ」	「アトビサリ
12	- 3	Feaolloidea	Feaelloidea
13	+ 9	Bcier	Beier
〃	-10	Neoislides	Neobislides
17	+12	第1步脚跗節	第4步脚跗節
〃	+14	〃	〃
20	+12	定めた	定めた。
24	+ 1	(? Ja-	(?); Ja-
43	+ 1	特 徴	特 徴
44	+ 4	ロムボック	ロムボック
50	+13	Tarantulinae も	Tarantulinaeのも